萩原朔太郎の郷愁

国文学科一号　浅井陽子

目次

序
一、『天に怒る』にみる朔太郎の思想
二、『詩の原理』にみる朔太郎の思想
三、環境否定による郷愁
結び
参考文献

序

朔太郎の詩は独特である。生理的、感覚的、官能的、病的など。しかし、私はそれらの詩に潜んでいる何ものかを感じる。そこには、常に人生に対して、何かを求めようとする朔太郎の心がある。

「私の真に伝へんとするリズムはそれでない。それらの『感覚的なもの』や『観念的なもの』でない。それらのものは私の詩の衣裳にすぎない。私の詩の本質―よって以てそれが詩作の動機となるところの、あの香気の高い心悸の鼓動―は、ひとへにただあのいみじき横笛の音の魅惑にある。あの実在の世界への、故しらぬ思慕の哀傷にある。」（『青猫』序）

すなわち、朔太郎の心底を流れるものは、生の実在へのあこがれなのである。「これ（実存感）こそ、おそらく、以後彼の生涯を通じての殆ど唯一の詩作の源泉となるところのものであり、（略）ポジティヴな形では『霊魂ののすたるぢや』、『遠い遠い実在への涙ぐましいあこがれ』として意識され、またネガティヴな形では『虚無』、『絶望』、『孤独』などの諸観念と彼の意識に招く」と那珂太郎氏が述べておられるとおりである。常に生の実在を探ろうとする朔太郎の心に、ノスタルジアの思いがわくのをみる。

ここで私が述べようとする朔太郎の「郷愁」とは、生の究極に対するあこがれにほかならない。それでは、なぜそういう郷愁を持ったのか。朔太郎は、人生に対してどのような思想をいだいていたのか。詩作品、評論、アフォリズム・エッセイなどに現われている朔太郎の思想を考察しつつ、朔太郎の郷愁、その本質なるものを追求していく。

一、『天に怒る』にみる朔太郎の思想

『天に怒る』は、朔太郎自身の過去における「特にその生活的心境を表現し」たものである。不老長寿の薬を求める孤独な王者、秦の始皇帝の気持を通じて、人間的幸福についての疑惑が語られており、究極的には、人間存在についての問題となるものである。なおこの物語の主人公、王朔方は、朔太郎自身を託した人物である。

日本で悟りを得た徐福は、抽象的な観念が全くなく、行為それ自

体を具象的に実現している生活、すなわち生活の上からも、文明の上からも冥想しないで体験する日常生活そのものが、真善美の理想であると言う。そこに充分な満足と享楽を見出し、自然と共に天命を楽しむ生活が自然にかなっており、「真理は具象的でなければならず、具象的なものは現実的なものの外にない」と観念より行動が真理であることを、彼は力説する。

しかし、王朔方は、人生に対して何の価値や真理を求めようとしない生活、あるがまゝの人生にあぐらをかいているような生き方に決して同調できないのである。

「もし愚味の蛮人の生活をみて、それに最も深遠な意義を感ずる人があるならば、僕はその人の思想に敬服する。けれども敬服するのはその人の思想であって、実際に何も知らない蛮人ではないのです。（略）実際に何も知らず、牛馬である故に無為自然の道に適ってゐるなら、そんな生活は呪はれてしまへ。僕はそんな自然主義に反対する。意味のない真理は無にひとしい。意味のない生活は墓にひとしい。僕は牛馬として幸福にくらして居る人よりは、人間として悩んでゐる人を崇敬します。」

このように王朔方は、人生への野心や熱情を持たず、達し難い理想などへの焦躁すらせず、ただ素直に現実を肯定し、現実する環境に意義を見出すことのできる生活に、何ら人生的な熱意を感じることができない。むしろ彼にとっては、現実は不完全なものであり、絶えず環境を切り開き、生活の向上を欲してやまないのである。彼は、人生に対して情熱をもつ浪漫主義者である。

朔太郎は、現実をそのまま肯定し得ない。彼にとっては、現実を越えィデヤがあってこそ人間的な人生であり、その観念をもっと深めていくところに、朔太郎の生への郷愁が現われるのである。

二、『詩の原理』にみる朔太郎の思想

客観派の文学においては、「人生は一つの実在」であり、生活の目的は「現実なる世界に於て、自然人生の実相を見、真実を観照し存在の本質を把握することに外ならない。」だからこの派の文学は、「この現実する世界に於て、すべての「現存するもの」を認め、そこに生活の意義と満足とを見出さうとするところの、レアリスチックな現実的人生観に立脚して」いる人生の観照のための芸術である。

一方、主観派の文学は、「人生は現に『あるもの』でなく、正に『あるべきもの』でなければならない。」なぜなら「『あるがままの現実世界』は、邪悪と欠陥とに充ちた煉獄であり、存在としてこの誤謬であって、認識上に肯定されない虚妄」だからである。ゆえに主観派の文学は、人生の認識のための表現ではなく、情意の燃焼する「意欲のため」の芸術なのである。

以上のような客観派、主観派の別は、朔太郎自身も言っているように、自己の人生観の相違によるものである。前者の人生観では、実在は現実の中に存在し、後者のそれは現実の中にあるのではなく、自分自身の主観の理想とする観念の中に存在する。この主観派の人生観こそ朔太郎の人生観である。これは第一章によって明らかにされている。すなわち彼にとって、イデヤは「その生活の目標であり、規範であり、願望される一切の理想」となる。

人生の観照が、そのまゝ芸術の表現である客観的な芸術家と違い、主観的な芸術家、朔太郎にとって芸術（表現）は、「かかるイデヤに対するあこがれであり、勇躍への意志」なのである。

ところが、その希望が達せられ、イデヤが現実し得たなら、もう

芸術は不要となろう。しかし、「真の芸術家の有する夢想は、イデヤの深奥な実在に触れてるもので、永遠に実現される可能がない。」と彼は述べる。実現の可能性がないとわかっていながら、なお願わずにいられないという朔太郎の生々しい人間性、人生に対する情熱、真剣さを、そこにみることができる。彼は、永遠なる価値への志向を抱いているのである。

実現される可能性がないゆえに、その芸術は時には「歎息」となり、「祈ろう」となりあるいは「絶望の果敢なき慰めし悲しき玩具」となる。そして芸術（表現）は彼にとって、「真の第一義的な仕事でなく、イデヤの真生活に至る『生活のための芸術』」なのである。単に生活を描くことによって「生活のため」というのではなく、「生活に理念を有し、イデヤに向っての意欲を掲げることによって、特に『生活のための芸術』という。朔太郎は、何はともあれまず生きなければならなかった。人生の既成事実の上にあぐらをかゝず、究極の真理をつかまんとする事が、彼の生活のすべてであった。これは朔太郎の次のことばで一層明らかになる。

「働くといふことの真の意味が、空漠として捕捉されず、意志に現実されなかったのだ。（略）ところが私の生活には、欠伸なんてものは一つもないのだ。寝ても醒めても、私は忙しくて仕方がないのだ。何か知らないが、自分の為なければならない仕事、生きなければならない人生を見付けるのに忙しいのだ。」

郷里、前橋において、朔太郎が怠惰な人間とみられた理由がここにある。しかし、彼の「仕事」は深奥なる意味で語られなければならない詩人、朔太郎にとって、文学の中の「詩」とはどのようなものであったのか。彼は「詩の本質とするすべてのものは、所詮『夢』といふ言語の意味に、一切尽きてゐる如く思はれる。」と論じている。すなわち「詩」とは、「感情の意味によって訴へられたる、現在しないものへの憧憬」なのである。

朔太郎の詩に郷愁の潜むゆえんがここにある。詩をつくること自体が、そのままイデヤへの憧憬に結がるからである。朔太郎の詩は生活に現実されない非有のものを、美において実現しようと欲する人生のやみがたい情念にもとづいている。彼は、「詩」とは「主観的態度によって認識されたる宇宙の一切の存在」とさえ言う。

次に詩の形式論では、「詩とは詩的な内容が詩的の形式と取ったものでなければならない。」と、形式は内部からの必然性に基づいていなければならない。そこに朔太郎「彼自らのもの」の主体的姿勢が如実に現われている。

詩人は、何者にもまさって「現存（ザイン）しないもの」への憧憬をもつ。そして、これのみが、朔太郎の生活である。詩精神があってこそ、生活の意義があるとするところに、朔太郎の絶対的なものがある。

「詩！　我々はこの言葉の中に響く、無限に人間的な意味を知ってゐる。（略）然り、詩は人間性の命令者で、情慾の底に燃えてゐるヒューマニティーだ。我々はそれを欲しても欲しないでも、意志によって駆り立てられ、何かに突進せねばならなくなる。詩が導いて行くところへ直行しょう」

朔太郎にとって、人生とは詩が実現されることの夢である。そして、それへの思慕（エロス）にすぎないのである。

三、環境否定による郷愁

朔太郎は、群馬県で医者の長子として甘やかされて育ち、成人しても仕事をもたない彼に対して故郷の人の目は冷たかった。家族主

義の陰鬱さもあった。彼は、「ここには文明がない、／ここには人間的なものはなんにもない。」と個を尊重し、自由で生き生きとした生活のできない田舎を否定する。しかし「故郷」は、単に郷里前橋だけを指すのではなく、近代文化から立ち遅れた無知の郷里は、当時の日本の時代性をも象徴していたのである。文壇では自然主義が浸潤していた時であり、「すべての『詩』と『詩的精神』とが殺戮され」ていた時代であった。朔太郎は、当時の日本の自然主義的な精神をいっさい否定したのである。

朔太郎は、都会の詩を多く歌った。しかし彼の詩に現われた都会的性質は、都会の実際の生活に即して書いたものではない。そこには内に潜んでいる切実なる近代の精神がある。それは、「ありとあらゆる近代の思想とその感情」なのである。ここには、自由への勇躍の意志がある。これは既に、「田舎と都会」という素朴な比較に終わるものではない。「あり得べきもの」と願う社会的環境の精神を歌っているのである。

大正十四年、朔太郎一家は東京に移住した。彼は、そこでたちまち実人生の没落感を味わわなければならなかった。

「ああ人生はどこを向いても／いちめんに麦のながれるやうで／
遠く田舎のさびしさがつづいてゐる。」

彼が実生活の圧力に対して、極度に脆かったことも一因であろうが、同時に都会への失望は、先に観念としてとらえた「あるべき都会」と、実際の都会との甚しい相違にも起因するのである。

「私は時々、大東京の真中に草蓬々たる田舎を眺め、銀座ビル街の近代市区に、蒼乎たる御用提燈の灯影を見て吃驚する。日本の大都会に見るこの幻影こそ、それら自ら日本文化の血液に残留してゐるところの封建制度に取り憑かれた幽霊に外ならない。」

たしかに都会は、田舎に比すれば自由であり個人主義思想も行き渡っていたかもしれない。しかし、それは、単なる比較にしかすぎなかったのである。早く目醒めた近代人、朔太郎の生活には適していなかったのだ。

それに、大正中期頃から社会的情勢は大きく変わらうとしていた。詩壇においても、近代詩から現代詩への転換がもたらされ、詩の現代化的変革運動が続出したのである。パッショネートな叙情詩を主張する朔太郎にとっては、モダニストのイメージ造型の詩法は、彼の詩作態に反するものであった。

朔太郎にとっては正当に成熟し得なかった近代社会、新詩壇の登場、そして実生活の問題など、「あるべきもの」と彼が思惟し憧憬する人生が裏切られた時、彼はまた否定しなければならない。

ヒューマニティーがある所に生ずるニヒリズムが、朔太郎のニヒリズムなのである。人生の意義を求める熱情、ヒューマニティーがあったからこそ人生への深刻な彼のニヒリズムがあった。私は、「汝の家郷はあらざるべし」と歌の「漂泊者の歌」には、ニヒリズムのイロニイであるロマンチシズムが潜んでいるとみる。「かって欲情の否定を知らず／汝の欲情するものを弾劾せり」と、かってからあらゆるイデヤに欲情し、そして欲したいっさいのものを虚妄なるものとして否定してきた。しかし、「よし人生は過失なるも、我が欲情するものは過失に非ず。いかんぞ一切を弾劾するも、昨日の悔恨を悔恨せん。」（『新年』より）となお彼は欲情することを否定せず、それらいっさいのものを弾劾したことも悔恨しない。「形而上的な飢渇のうちに、たしかな実在を欲情し、そして弾劾を繰りか

えす一つの輪廻を、むしろ『意志』として肯定している」と言う飯島文氏の説に私も全く意を同じくする。

「ああ汝漂泊者！／過去より来りて未来を過ぎ／久遠の郷愁を追ひ行くもの。（略）かって欲情の否定を知らず／汝の欲情するものを弾劾せり。（略）汝の家郷は有らざるべし！」（「漂泊者の歌」）

この烈しい感情は、彼が愛も家郷も持たない永遠の漂泊者たることをのみ言い放っているのではない。「在る」と信じていた世界が実現し得なかった時、人生上の飢渇感を味わうと同時に朔太郎のニヒリズムがそこにある。このニヒリズムは、日本自然主義の無気力なるがゆえのニヒリズムとは意を異にする。

「ロマンチシズムの幻滅したのがニヒリズムである。（略）ロマンチシズムとニヒリズムとが、同じやうにまた一つの相対観念である。そしてこの両者の基調する共同の一線が、即ちヒューマニズムなのである。故にヒューマニズムの基調が無い所には、初めから浪漫主義も虚無主義もある筈がない。」

ヒューマニティーがある所に生ずるニヒリズムが、朔太郎のニヒリズムなのである。人生の意義を求める熱情、ヒューマニティーがあったからこそ人生への深刻な彼のニヒリズムがあった。私は、「汝の家郷はあらざるべし」と歌う「漂泊者の歌」には、ニヒリズムのイロニイであるロマンチシズムが潜んでいるとみる。「かって欲情の否定を知らず／汝の欲情するものを弾劾せり」と、かってからあらゆるイデヤに欲情し、そして欲したいっさいの虚妄なるものとして否定してきた。しかし、「よし人生は過失なるも、我が欲情するものは過失に非ず。いかんぞ一切を弾劾するも、昨日の悔恨を悔恨せん。」（『新年』より）となお彼は欲情することを否定せず、それらいっさいのものを弾劾したことも悔恨しない。「形而上的な飢渇のうちに、たしかな実在を欲情し、そして弾劾を繰りかえす一つの輪廻を、むしろ『意志』として肯定している」と言う飯島文氏の説に私も全く意を同じくする。

「いかんぞ人生を展開せざらむ。／今日の果敢なき憂愁を捨て／飛べよかし！飛べよかし！」（「遊園地にて」）

「ああすべて卑蔵なるもの／汝の非力なる人生を抹殺せよ。」（「我れの持たざるは一切なり」）

と、虚妄の人生に対して「エゴの強い主観を内部」に秘めて、人生への情熱がいちだんと深まっている。「在るべき世界」への憧憬がさらに深まっている。ここに、朔太郎の真のノスタルジアがある。ノスタルジアとは、単にかってあったものを獲得しょうと願う心ばかりではない。朔太郎のノスタルジアとは、あきらかに感傷とは類を異にしたひとつの認識とも言えよう。人生に対する厳しい認識である。この認識が高じたところに「標泊者の歌」が歌われたのである。

朔太郎は、常に現実の環境を否定してきた。いや、否定せずにはおれなかったのである。虚妄の人生に対する反逆とも思ふる精神は、「在るべき世界」を求める形而上的思想であり、それが朔太郎の底を流れ続けた思想なのである。まさしく彼は、「過去より来りて未来を過ぎ、久遠の郷愁を追ひ行くもの」の姿であった。

結び

人生の道を通じて、萩原朔太郎はどこまでも満たされることのない飢渇が続いていた。三好行雄氏は、「かれは、はげしく社会への憤怒をたぎらせていたと見えつつ、実は否定のゆきつくべきなにものも予感できなかったのではないでしょうか。」と述べておられるが、しかしながら、ここで「否定のゆきつく」所を問いつめる必要

はない。それよりも、私は否定せずにはおれなかったところに、人間朔太郎の姿を見るのである。それはあまりにも形而上的であり、人間的であり、純粋な魂であり、浪漫的である。この浪漫性は、何々のためというあらゆる一切のためを問題にせずに起る。それは一切の巧利的問題でなく、真の己に立ち返ったものの中から起る。

「僕は自ら、何等の思想的解決をも有して居ない。けれどもただ、解決があたへらるべき未来に向って、僕の『暗示』を投げようとする意志をもっている。」

彼の「詩情するところの精神は、永遠のヒューマニズムに本質して」いた。それゆえ、彼は常に「夢を追う人」なのである。

参考文献

「萩原朔太郎研究」　伊藤信吉編　思潮社
「近代文学鑑賞講座」―萩原朔太郎　伊藤整編　角川書店
「萩原朔太郎」　藤原　定　角川新書

球磨郡山江方言の敬意表現法

内山葉子

はじめ

球磨郡には、国語史上、古語に属する敬語(鹿児島的敬語)の多いことに気づき、興味を持っていたので、これを、調査、研究してみようと考えた。そこで、本稿では、球磨郡山江地方における生活語の中から、敬意表現について、観察、把握しようとするものである。

山江は、熊本県の東南部、鹿児島県と、宮崎との境に位置する球磨郡の西南部にあり、全体の約八三%が山岳で、耕地は、約四%である。中央を、南北に縦断する山岳で、二つに分かれており、東部を山田地区、西部を万江地区に分けている。もともと、この二つの地区は、別の村であったが、明治二二年四月市町村制施行により合併し、山江村と称して現在に至っている。

中心部は、東部の山田地区で、役場、農協、駐在所郵便局、村内唯一の中学校などが、山田味園に集中している。この味園は、人吉市内から、約四キロメートルのところにあり、交通の便もよい。

また、郵便、電話は、人吉局に属しておりその他の面でも、人吉市に依存する度合が大きい。たとえば、山江村は、無医村であって病人は、すべて、人吉市内の病院に運ばれるし、買物も、ほとんどが、人吉市内の店でなされている。

調査方法としては、自然会話の中から、敬意表現に関するものに注意しながら、カードに書きとめる方法と質問法の二方法を用いた。特に、敬意表現をよく使い、方言をよく使うと思われる。老人層、中年層の会話に注意した。